



○総論

- ・キーワードはコミュニケーションとフレキシビリティ。一見無駄と思えるスペースこそ必要。
- ・オープンなスペースと、集中できる空間の両方が必要。

○コミュニケーション

- ・研究所の中のコミュニケーションも重要だが、部局を越えたコミュニケーションも重要。コミュニケーションがないと新しいアイデアが生まれない。
- ・所内のコミュニケーションの仕掛けの一つとしては、オープンラボがあるが、全員が集まれるコミュニケーションスペースもあるとよい。部局を越えた仕掛けの例は、ランチやコーヒープレイクに行くと日常的に顔を合わせることが出来る施設配置など。ハードだけでなく、ソフト面の仕掛けも重要。例えば、コーヒーが無料で飲めるなど、ひとが自然とその場に行く気になる工夫も必要。
- ・学生や研究者だけでなく、支援組織（事務局）でもオープンオフィスのような工夫があってもよい。

○フレキシビリティ

- ・研究内容は5年で変わる。それに合わせて容易に改修できることがポイント。海外は天井裏がむき出し、固定の壁がないなど改修が容易。ドライ、ウェットも自由に変えられる。
- ・フレキシブルな設計は長期的には経済的でメンテナンスも容易。そうした視点で施設を考えるべき。

○産業界との連携に必要な施設

- ・アカデミアはオープンがよいが、企業の立場からするとある程度クローズな部分が必要。
- ・企業も大学の発想を求めている。大学内で交流できれば企業としてもメリットがある。

○学生への教育方法の変化

- ・教えること、学ぶことが膨大になっており、全てを身につけることは難しい。
- ・基本的な事項は従来型の講義で学び、その先は個々の興味関心に応じて、インタラクティブな学修が重要。

○総論

- ・若い学生や研究者の人材育成、教育研究活動を支えるためには施設環境が整えられることは大前提。
- ・(多様な財源の確保の前提として) 科学者、研究者、そして大学人が社会から尊敬され、存在感を高めることが必要。
- ・「日本における大学の存在意義」「国立大学施設のあるべき姿」を示すべき。



○海外の大学との格差

- ・海外の大学をたくさん見てきたが、日本の大学は貧しい。自由な研究活動を行うスペースがない。「ここで過ごしたい」「ここで研究をしてみたい」と思えるような施設が必要。
- ・海外の研究者や留学生を呼び寄せるにもセミナー室が十分でないなど、また現在の宿舎や研究環境では不十分。

○コアファシリティ

- ・海外の大学ではコアファシリティ(共用施設)スペースがあるのが一般的。コアファシリティがあれば、予算の少ない若手研究者でも共用機器を使って研究活動が可能となる。コアファシリティは効率化だけではなく、様々な人が集まりコミュニケーションが生まれる場所でもある。例えば、どこからでもアクセスしやすい場所にコアファシリティを計画するなど、目的を持った設計が必要。さらにそれを維持する上で、質の高い人員の確保が必須である。

○コミュニケーション

- ・日本の民間企業の研究施設では、最近いつでも、どこでも議論ができるようなスペースが用意されている。
- ・若い学生や研究者がたこつぼにならず様々な交流を日常的にできることが重要で、そのための設計と仕掛けが必要(イギリスではティータイムに必ずみんな集まってコミュニケーションを取るのが当たり前)。

○フレキシビリティ

- ・時代によって研究ニーズは変わるので、臨機応変に改修が可能となるような強度とフレキシビリティを当初から考えて施設を設計することが重要。